調査実習の
事例報告

# 〈震災と原発〉を沖縄で／沖縄から社会学的に調査する
## ――沖縄国際大学社会文化学科・社会学ゼミの調査実習――

澤田　佳世（沖縄国際大学総合文化学部准教授）

## 1　はじめに ――沖縄国際大学と社会調査士資格

米軍普天間飛行場に隣接する沖縄国際大学（以下，沖国大）。沖国大の総合文化学部社会文化学科（以下，社会文化学科）は，フィールドワークを方法の軸に，沖縄を学際的に学び，考え，行動する学科である。沖縄を中心に，沖縄をとりまくアジアや世界の社会や文化，歴史と現在を知り，比較社会・比較文化という観点から沖縄に接近する。学生自らフィールド（現場）に出て，沖縄を生きる／生きた人間とつながることで，人間の行為，人間が織り成す文化，人間が形作っている社会を体感し，様々な顔をもつリアルで生々しい沖縄への理解と問題意識を深めている。

2007年度から社会調査士資格認定校となった沖国大で，社会文化学科は学科のカリキュラム・ポリシーと連動させながら資格取得対応のカリキュラムを編成している。学科の専門必修科目として社会調査法Ⅰ（A科目），社会調査法Ⅱ（B科目），および基礎演習（G科目）がある。専門選択必修科目として社会統計学Ⅰ（D科目）と社会統計学Ⅱ（E科目），共通科目として統計学Ⅰ（C科目）が提供されている。基礎演習は社会文化学科2年次の専門ゼミであり，社会学・平和学・環境学・南島民俗学・アジア文化人類学・歴史学という6つのゼミで構成される1年間の通年科目である。基礎演習の各ゼミは，夏期集中講座となる実習（必修2単位）を併設しており，毎年テーマを決めてフィールドワークを実施する。実習は，フィールドを重視する学科，社会文化学科の最も重要な学びのプロセスとなっている。

沖国大社会文化学科・社会学ゼミでは，2011年3月11日の「東日本」大震災と福島第一原子力発電所「事故」による未曾有の災害と被災の発生を受け，〈震災と原発〉を11年度の基礎演習と実習で取り扱う主要テーマとして設定し，沖縄本島をフィールドに調査実習を実施，テーマの深層的理解とともに質的調査法の実践的理解を試みた。

本稿は以下，第一に，なぜ，どのように沖縄で／沖縄から〈震災と原発〉なのかに焦点を当て，問題関心を整理する。第二に，〈震災と原発〉調査の企画と実査，調査報告書の作成に至る授業の流れと学生の取り組みを紹介する。最後に，フィールドワークを通じた被災者とのつながりと学生の知的成長の可能性について述べたい。

## 2　「〈震災と原発〉を沖縄で／沖縄から社会学的に調査する」ということ

社会学は「他者理解と自己反省のための科学」（野村，1998）といわれる。「権力作用によって把握しにくくなっている社会的現実を，自己反省的かつ他者理解的に解明する」（同上）ことは，社会学の使命の1つである。他者理解のためには，日常生活の「自明性」を疑い他者の存在に気づくこと，その他者の声と経験を頼りに社会の仕組みを解明していくこと，現代の社会問題に社会学的想像力と歴史的想像力を駆使しながら関わること，オールタナティブな社会的弱者の視点から社会現象を総合的かつ批判的に認識することが要求される。

〈震災と原発〉を主要テーマとするにあたり，学生たちと共有した問題意識は以下のとおりである。「〈震災と原発〉を沖縄で／沖縄から社会学的に調査する」ということは，震災と原発の被災者や避難者の〈痛み〉を想像することである。社会学ゼミでは，被災者や避難者として表出する他者の存在に気づくこと，その他者の声と経験を頼りに〈痛み〉を生み出す社会の仕組みを解明すること，他者に〈痛み〉を押しつける社会構造を照射

すること，さらにその社会構造を社会学的な格差構造の問題として，沖縄の歴史／現在と関連づけながら考え理解することを目指した。

そこには，沖縄に集中する米軍基地と原発問題との構造的類似性への想像力が喚起される。梶田（1988）らが提起した「受苦圏と受益圏」の概念を用いれば，沖縄と福島，米軍基地と原発の周囲に暮らす住民は，それぞれ基地と原発の「受苦圏」にあたる。現代の大規模開発問題における「受益圏の拡大」と「受苦圏の局地化」という基本構図は，米軍基地と原発の問題にもあてはまる格差構造である。拡大する「受益」に対し，「受苦」はグロテスク化しながら限られた地域に極度に偏重していく。全国規模で広がる「受益圏」に対し，不可視化される「局地化した受苦圏」の人々の〈痛み〉と声をどのように可視化していくのか。「がんばれ，日本！」のかけ声に潜むナショナリズムと米軍の「トモダチ作戦」によって沖縄の「受苦」が忘却されないように，〈震災と原発〉という社会問題を沖縄で／沖縄から考えることは重要である。

加えて，他者に内在する階層性も照射する。「リスク社会（危険社会）」（ベック，1998）と表される現代社会において，社会的に生産されるようになったリスク（危険）は，エスニシティや「人種」，ジェンダーやセクシュアリティ，階級などの社会秩序に沿って不平等に分配される。既存の社会秩序に依拠してリスク（危険）を被る他者としての被災者・避難者が生み出される一方，そうした社会秩序が他者の内部を序列化し，女性や性的マイノリティ，障がい者，高齢者や外国人といった震災弱者を生み出していく。

ソルニット（2010）が指摘した災害時における市民社会・市民の主導権の有効性に共鳴しながら，冷静にならず，思いっきりジタバタと考え動き，声をあげること。そして，ゲリラ的に被災者・避難者の支援行動も行いながら，長期的な支援活動の土壌作りをすることも目標に掲げ，2011 年度の社会学ゼミは調査研究活動をスタートさせた。

## 3 〈震災と原発〉調査の企画，実査，調査報告書の作成

2011 年度の調査テーマは，格差構造を伴う社会問題としての〈震災と原発〉である。〈震災と原発〉を沖縄で／沖縄から社会学的に調査することを目的に，〈震災弱者としての女性〉〈震災弱者としての高齢者・子ども・障がい者〉〈震災と情報・報道〉〈震災とボランティア・市民活動〉〈反原発・脱原発〉という 5 つのサブテーマを設定し，学生の関心に基づいて各サブテーマを担当するグループ分けを行った。その後，各グループでの文献探索による事前学習を経て，インタビュー調査など質的調査を中心とする沖縄での現地調査を実施，調査報告書を作成した。

基礎演習と実習の参加者は，社会文化学科・2 年次・基礎演習履修生 14 名と任意参加となる同・3 年次・演習（社会学ゼミ）履修生 13 名の計 27 名である。うち 3 年ゼミの学部生 3 名とゼミの卒業生である院生 2 名を調査助手として採用し，各グループのチームリーダー兼教育支援者・相談者としての役割を担ってもらった。

ここでは，調査実習を含む基礎演習での 1 年間に及ぶ取り組みの概要を，調査の企画，実査，調査報告書の作成の順に紹介する。

### 調査の企画・設計（基礎演習〔前期〕）

基礎演習の前期の授業では，調査の企画・設計として，各グループによる問題意識の整理と明確化，調査課題の設定を経て，調査技法の決定，調査依頼状とインタビューガイドの作成，調査対象者の選定とアポ取りなどを実施した。

なお，学生の主体的な取り組みを促し，調査被害を防ぐべく，調査実習を行うにあたっての注意事項を初回の授業で共有している。第一に，基礎演習では，所定のテーマのもとグループで問いを立て，情報を収集・整理・生産し，コンテンツを創り，構成を決め，分析と発見に至り，最終的に報告書を書くという一連の調査研究のサイクルについて，各グループが手探りで実践し達成しなければならないということ。第二に，グループでのアウトプットの生産が求められるため，学生の積極的かつ主体的な取り組みが期待されること。第三に，調査研究方法に関しては，既習／履修中である社会調査法Ⅰ・Ⅱや関連科目で習得した基礎知識をもとに，各科目で紹介された各種文献を精読・試行し，自分のものにしていくということ。第四に，調査地域および調査対象者に不快感を与えないよう，調査倫理にのっとり節度をもって行

表１　調査実習の実習期間と主な調査対象者・訪問先

| 実習期間 | 主な訪問先（ヒアリング・インタビュー調査）と調査経過 |
|---|---|
| 6月18日 | 「ひやみかち東日本！ 新生活応援交流会」（主催・琉球新報社，ラジオ沖縄，沖縄テレビ放送）で被災者・避難者と交流 |
| 8月5日<br>～8月9日 | 沖縄萩の会，沖縄県ボランティア・市民活動支援センター，沖縄県被災者受入対策チーム，琉球新報，NPO法人・沖縄県自立生活センター・イルカ，よりそい・情報支援ボランティア，つなぐ光など |
| 8月10日<br>～9月19日 | 各グループによる現地調査（調査報告書各章の調査概要を参照）<br>行政機関，支援団体（NPO含む），企業，地域住民，自助グループ，当事者コミュニティなど |
| 8月29日 | 調査経過報告会（沖国大にて） |
| 9月20日 | 調査経過報告会（沖国大にて） |

動すること。第五に，録音機器やデジタルカメラ，ノートなど社会調査に必要な道具・機材については各自用意すること（ただし，ICレコーダーは各グループに1台貸出）。最後に，グループで設定した問いについて，とことん調べ，考え続ける力を養うこと。加えて，複雑な現実，人間の〈痛み〉を前に，安易に「正解／答え」を求めないことである。

これら注意事項を踏まえ，主要テーマおよび調査研究方法に関する基本文献を提示し，ゼミ室に受講生用の図書貸出コーナーを設置した。基本文献については必読とし，折に触れて参照することを確認した。

続く第2回目の授業では，問題意識を共有するために，〈震災と原発〉の問題について「あなたは，今・これまで，何を思い，何を学び・考え，どのような行動をしていますか？」と問いかけ，第3回目の授業で各学生に3分間のスピーチを行ってもらった。

その後，上記5つのサブテーマを設定し担当グループを結成，前期授業での各グループ3回の口頭報告を通じて，調査の企画・設計を実践した。第1回グループ報告は，(1) 問題意識の明確化と(2) 資料探索の結果発表（新聞3紙以上，その他各種資料探索）を主な内容とする。具体的に，調査の目的（何について調べるのか，明らかにするのか），焦点化したテーマ（5つ程度），問題の所在（なぜ，それを明らかにしなければならないのか），サブテーマについての資料探索の結果（何が，どのように明らかになっているのか），問題意識（これから何について，どこまで明らかにしたいのか）を明確化して整理し，配布資料に基づく報告を行った。各報告には，受講生および教員から質問とコメントを提示している。

第2回グループ報告では，前回報告のコメントを受けて課題に取り組み，(1) 資料探索の継続と(2) 問題構造化の中間報告を行った。問題構造化に関して学生が考えるべき要点は，どの問題を調べるのか，どのように調べるのか，調査項目として何を知りたいのか・聞くのか・収集するのか・見るのか，ならびに調査対象者として誰を選定するのか・知りたい情報はどこにあるのかとした。報告内容は，修正した調査テーマ，調査の目的，問題の所在，資料探索の結果，および調査対象者の一覧表を中心とする調査計画である。

報告後の学生間の討論と教員からのコメントを受け，グループごとにさらなる問題の構造化を行い，第3回グループ報告では，実現可能性を考慮した調査計画を発表してもらった。調査対象者の一覧，調査対象者別の質問項目とインタビューガイド，調査対象者別に収集すべき資料群，調査依頼状の報告である。報告と前後して調査対象者へのアポ取りも開始している。3回の報告と課題の明確化を経て，グループごとの調査の企画・設計を終え，夏期集中の実習での実査に備えた。

### 実査（実習・夏期集中）から調査報告書の作成（基礎演習〔後期〕）へ

〈震災と原発〉調査は，8月，9月の夏期休暇期間に実査の段階に入ることになった。なお，実査に先立つ6月には，沖縄で開催された被災者・避難者との交流会に参加して事前学習を行い（**表1**），被災者・避難者の意味づけに依拠しながら調査テーマに関する問題理解を深めた。

写真１　実習中の学生の様子（よりそい・情報支援ボランティアと沖縄萩の会での調査より）

参加学生全員での調査の実施時期は８月５〜９日を中心とする。さらに８月10日から９月19日までは，各グループによる補足調査を実施した。調査地はいずれも沖縄本島である。沖縄をフィールドとした理由は，上述のとおり，沖縄をめぐる構造的差別の歴史と現在に思いをはせながら，格差構造としての〈震災と原発〉問題を考えることの意義を鑑みたことにある。一方で，必修科目でありながら経済的理由から受講生全員が被災地に赴くことが困難であることも，沖縄を調査地とした理由である。

調査の範囲・対象については，表１を参照されたい。インタビュー調査の対象者は，行政，民間支援団体（NPOを含む），企業，地域住民，自助グループ，被災・避難当事者などである。全員で行った調査の対象者は，「ひやみかち東日本！ 新生活応援交流会」に参加した被災者・避難者，沖縄萩の会，沖縄県ボランティア・市民活動支援センター，沖縄県被災者受入対策チーム，琉球新報，NPO法人・沖縄県自立生活センター・イルカ，よりそい・情報支援ボランティア，つなぐ光である（**写真１**）。

インタビュー調査は，インタビューガイドに基づく半構造的面接法による。その他，関連する印刷物や配布物，新聞・雑誌記事，映像資料，統計資料や文献資料も現地調査の中で収集し，分析対象とした。調査項目は，調査対象者によって異なる。たとえば，支援団体や自助グループは，団体を立ち上げた背景・経緯，活動目的，メンバー構成，活動内容，これまでの支援の実績とその相談・支援内容，今後の活動内容と現在の主要な課題，行政機関や他の市民団体（NPOなどを含む）との協力関係，支援情報の発信の方法，被災者・避難者に関する情報の入手方法，沖縄の学生に伝えたいことなどを調査項目とした。

インタビュー調査に際して，事前に，ICレコーダーやノート，デジカメなど必要機材，調査依頼状やインタビューガイドの準備を確認し，グループ内での役割分担と質問内容の再検討を行った。インタビュー時には，自己紹介と調査協力へのお礼から始め，調査の説明を述べた後，録音の許可を得ることを目指した。その後は，インタビューガイドに沿って時間配分に注意しながら質問し，最後に調査対象者が質問以外に言いたいことはないか確認するよう心がけた。再度お礼の言葉を述べ，必要な場合には調査への再協力依頼と情報提供者の紹介をお願いし，それぞれのインタビューを終了している。

実査期間中には，８月と９月下旬の各１日を使って調査の経過報告会を開き，各グループで行っている継続調査の状況を報告し合い，学生間で調査中に生じた問題や課題の整理と共有を図った。

基礎演習の後期では，各グループ２回の口頭報告と連動させながら，調査報告書を作成した。全体および各グループで行った調査の対象者は，被災・避難当事者への個別インタビューを加えると30を超える。対象者の許可を得て録音したインタビュー内容は，すべて文字起こしを行い，トランスクリプトを作成した。聞き取り記録は，フィールドノートやフィールドメモを参照しながら，グループ内でコーディングを行った。コーディングによって浮かび上がったキーワードやキーフレ

写真２　石巻南ロータリークラブに贈った寄せ書きと学生たち

ーズを基に，テーマと筋立てを検討し，後期のグループ報告ではその内容と報告書の章立て案を発表してもらった。報告内容にコメントを付けつつ，聞き取り記録の妥当性を高めるために，印刷物や関連する新聞記事，文献を収集して相互参照するよう促している。学生同士で中間報告と討論を繰り返し行うことでインタビュー調査の信頼性の向上に努め，調査対象者の主体的意味づけに基づくテーマの深層的理解を試みた。

12 月末には中間報告書を作成し，1 月にグループ間で原稿を交換し意見を出し合った。2 回の校正を経て，2012 年 2 月に調査実習報告書を刊行した。他者理解をとおして社会の仕組みを探究した結果は，その他者に向かって学生自らの言葉で表現・説明し，他者を含む社会へと還元されなければならない。社会学ゼミの調査実習報告書の内容は，2011 年度 1 年間の調査を踏まえ，〈震災と女性（表面化する女性問題，コミュニティと市民運動）〉〈震災弱者：高齢者・子ども・障がい者〉〈震災とボランティア・市民（被災地に向けてのボランティア活動，沖縄県内のボランティア活動）〉〈震災と情報・報道（震災時の情報発信，情報分類によるメディア，情報の負の側面，情報によって起こる弊害）〉〈反原発・脱原発（原子力と「安全」神話，反原発と市民運動）〉という 5 部構成にまとめられた。内容の詳細については，本報告書を参照されたい。

## 4　おわりに

2012 年 4 月，調査に協力いただいたすべての対象者・団体等に対し，調査実習報告書を学生が直接配布して回り，2011 年度社会学ゼミの調査実習は終了した。

フィールドに出て人間の営み，怒りや痛み，希望を体感することで，学生たちは，既知の概念や理論と結びつけながら社会の仕組みを理解し，他者とつながることで知的成長を遂げる。社会学ゼミの学生は，調査活動の一環として 11 月の沖国大学祭で調査中間報告の展示を行うとともに，模擬店とバザーを開催し，すべての収益を寄附することを決めた。2012 年 3 月，県内 2 つの民間支援団体と，私が関係をもつ宮城県石巻市の石巻南ロータリークラブに寄附を行った。その際，調査報告書に加え，寄せ書きや手紙，手作りの沖縄流絵はがきなども贈っている（**写真 2**）。石巻への寄附は，同クラブの代表者を介して，甚大な被害のあった女川町の図書館「女川つながる図書館」の運営に役立ててもらうことになった。石巻から送られた図書館の開館式の写真には，ゼミ生が贈った寄せ書きが飾られた図書館で，女川の子どもたちが絵本を読む姿が映っている。フィールドワークが調査法にとどまらず，ボランティア活動や地域活動など社会実践も含むことを，学生自ら発見し実践した 1 年となった。学生と社会，その双方に成長をもたらす調査実習のあり方を，担当教員として今後も模索し続けたいと思う。

文献

ベック，U.／東廉・伊藤美登里訳，1998，『危険社会 ―― 新しい近代への道』法政大学出版局。
梶田孝道，1988，『テクノクラシーと社会運動 ―― 対抗的相補性の社会学』東京大学出版会。
野村一夫，1998，『社会学感覚（増補版）』文化書房博文社。
沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科・社会学（澤田）ゼミナール，2012，『2011 年度 調査実習報告書』。
ソルニット，R.／高月園子訳，2010，『災害ユートピア ―― なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房。

調査実習の
事例報告

# 職人をフィールドワークする
## ――弘前大学人文学部社会調査実習の実践――

杉山 祐子（弘前大学人文学部教授）・山口 恵子（東京学芸大学教育学部准教授）

## 1 はじめに

教えられた住所に向かう道はいつしかリンゴ畑の間を抜ける農道になった。道の両側に満開のリンゴの花が揺れている。道に迷ったかと不安になりはじめたころ，農家の庭先に丸い竹の輪が立てかけてあるのが見えた。車を降りてみると，あたりには木の香がただよい，扉を開け放った建物の中で，1人の男性が丸い大きな木の筒を作る作業をしていた。あらかじめ訪問の約束をしていたので挨拶の声をかけると，その男性は柔和な笑顔を向けて挨拶を返し，私たちを招き入れてくれた。

この男性は，全国でも数少なくなった桶作りの職人さんである。旧城下町・弘前の郊外にある自宅兼作業場で仕事をしている。「いまどき木の桶など売れるのだろうか？」と思いきや，忙しい時期は注文を待ってもらうほどだという。実は，この職人さんがいま作っているのは，桶ではなくて，太鼓の胴なのである。この方が作った太鼓の胴は，現在では，東北一円の祭で使われている。この方の半生を聞き取っていくと，桶作りの仕事が弘前という地方都市の特徴やその変化，さらに日本全体の変化を映し出していることがわかってきた。

この職人さんへの訪問は，弘前大学人文学部で毎年開講している社会調査実習の一環で実施したものである。本稿では，社会調査を学ぶ授業の事例報告として，私たちが2009～2010年度に実施した「弘前の職人」調査を紹介しよう。

## 2 フィールドワークを核に――弘前大学人文学部の社会調査実習

弘前大学人文学部で実習を担当する社会行動コースの教員の専門は，人類学，社会学，社会心理学と多彩であるが，いずれも人間が生きる現場の事象から問いを立てることを研究の原点と考えており，フィールドワークを核とした学際的な教育を目指している。社会調査実習はこのコースが最も力を入れてきた授業で，すでに30年の歴史がある。

弘前大学人文学部の学生は2年生から専門のコースに所属するが，社会調査実習の授業は，2年生と3年生が合同で行う。社会行動コースに所属する学生は，2年生で必修科目（社会調査実習A・B），3年生で選択必修科目（社会調査実習Ⅰ・Ⅱ）を履修することになっている。このカリキュラムでは，2年生で社会調査の方法をいわば見習い的に習得し，3年生では，自分たちが調査を主導する立場になって実習を進める。社会調査士取得のためのカリキュラムとの対応では，「社会調査実習Ⅰ（前期）」がE科目とF科目に，「社会調査実習Ⅱ（後期）」がG科目に登録されている。

授業時間は，毎週木曜日の14時20分から2コマ分をあてているが，作業が講義後の17時30分以降に及ぶこともあるし，フィールドワークという方法の性質上，休日を使うこともある。こうして学生は，2年次と3年次の2年間にわたってフィールドワークをみっちり学ぶことになる。4年次の卒業研究は，このカリキュラムの総仕上げと位置づけられており，ほとんどの学生が社会調査の手法を使って卒業研究を行い，論文を執筆する。

実習の授業は，約60人の学生が調査テーマごとに2～4班に分かれ，それぞれの班を2，3人の教員が担当する。通常は班ごとに実習を進めるが，4月の全体ガイダンス以降，年間数回はコース全員が集まり，成果発表と討論をする機会を設けている。7月には，合同で実習の中間報告会を開く。それを踏まえて後期の実習を展開し，成果を12月の最終発表会で発表する。学生が個人での研究について具体的なイメージをもち，自身の卒業研

究についても早くから考えられるように，4年生の卒業研究構想発表会，中間発表会，最終発表会もコース全体で行い，学生相互の交流をはかっている。

こうした機会をとおして，学生たちは，異なる視点や方法論によるフィールドワークの多様性を知ると同時に，自分たちの研究成果を客観的に検討し，わかりやすく伝えるための表現方法を実践的に学ぶ。発表の場で学生は，他の班の発表にライバル心を燃やして臨むのだが，良い点は素直にほめ，的確な質問やコメントをする姿勢を身につけるので，学びの相乗効果が高い。

調査対象とテーマの大枠は，担当教員の合議で決める。この実習では地の利を生かし，青森県内でもとくに津軽地域を対象としてフィールドワークを行ってきた。この数年間だけでも，出稼ぎ，黒石の温湯（ぬるゆ）温泉，岩木川のウグイ漁，過疎・限界集落，大学生の人間関係，地方都市における若者の進路選択，青森県民の家計，ローカルイノベーションなど，テーマは多岐にわたる。実習テーマが教員の共同研究としても位置づけられ，教員が積極的に関わる地域密着型の調査研究として行われている点も特徴的である。

## 3 「仕事班」の実習の実際

私たちが担当したのは「仕事から都市をみる」を合言葉にした弘前の地域研究，通称「仕事班」の実習である。この研究では，伝統消費型地方都市である弘前の変容とそこに見出せる社会の特性に迫ることを目指した。2006，2007年にタクシー会社経営者とドライバー，2008年に中心商店街の自営業商店主を対象として調査を重ね，地域移動に特徴があることに気づいた私たちは，2009年からの2年間，弘前市内の職人を対象として調査を行った。職人に関する研究があまり多くは蓄積されていないことや，手に職をもつ人々の仕事や地域移動のありようがタクシードライバーや商店主とは異なるのではないかと考えたからである。以下，この2年間の実習の経過をおおよその流れに沿って紹介しよう。

### 2009年度の授業――「職人班」の発足

1年目の「仕事―職人班」には23名の学生が集まった。最初にブレーンストーミング形式で職人像を話し合い，インターネットや文献を使って，弘前の「ものづくり」と職人の種類を網羅した。それらを日常生活系，工業系，ねぷた・津軽系，食品系，伝統工芸系の5つに分類し，対象者のリストアップと下調べを重ねた。調査方法についても検討した。学生には，調査対象となる様々な手仕事の具体的なイメージがないので，聞き取りよりも仕事の「観察」を中心に据えることにした。共通の観察項目を作成し，観察法の練習も行った。先行研究の検討も同時並行して進めた。職人に関する文献リストの作成や，方法論についての文献も講読した。

5月初旬には，学生が対象者に電話でアポイントをとり，1回目の観察調査に出向いた。2，3年生混合で，3，4人が一組となり，学生だけで訪問する。教員の側からは，調査対象者にあらかじめ調査の依頼文を送っておく。アポイントをとるときには相手方の都合を優先することや，調査に手土産（教員がポケットマネーで用意した）を持っていくこと，すぐにお礼状を書くことも指導しておく。

調査準備にもっと時間をかける場合もある。しかし，こと職人に関しては，早く現場を見せてもらったほうが教育効果は高いはずだと考えたのだが，それは正解だったようだ。1回目の訪問以後，学生たちは積極的に調査に取り組むようになった。調査協力をいただいたのは，凧絵，太鼓，せんべい，鍛冶（2ヵ所），畳，印鑑，看板製作，木材加工の会社など，計9ヵ所であったが，どの方も非常に丁寧に学生たちに接し，手の技の奥深さを伝えてくださった。

学生は調査後すぐにフィールドノーツを作成し，1，2週間後の授業中にそれを発表する。観察結果は，可能な限り図表化するよう指導する。発表では，教員からも他のグループの学生からも遠慮ない質問が出される。他のグループのフィールドノーツを読み込むことで，自分たちの調査結果との比較対照の視点も生まれる。こうして6月末まで，調査に行ってはフィールドノーツの作成と発表を繰り返した。再度同じ対象者に調査に行く際には，随時，フィードバックを行い，事実関係や解釈の確認を行うように心がけた。

7月に入ると，中間発表会を目指して，それま

で蓄積してきたデータの分析と発表会の準備が中心になる。発表における論理展開の重要性はもちろんであるが，データを図式化して聞き手に的確に提示することや，わかりやすいプレゼンテーションの仕方なども指導する。発表会では，他の班の教員や学生から鋭い質問を浴びるので，発表する学生にとってはドキドキのステージなのであるが，ここでの質問やコメントは，その後の調査に非常に参考になる。

2009年度の後期は，夏休みの課題レポートの発表から始まった。課題は，すべてのフィールドノーツを読み込んで気づいたことを各自レポートにまとめることである。これをもとに10，11月には，前期調査で不足していた項目を中心に補足調査に出かけた。前期の調査から，職人の仕事環境が高度経済成長期に大きく変化し，その前後の機械化への対応に注目すべきであることがわかっていたので，後期は機械化への職人の意識や，仕事の仕方の変化について聞き取りをした。この頃には同じ対象者をすでに3回以上訪問していたので，どの学生も対象者への尊敬と親近感をもって，深みのある聞き取りをすることができた。

12月の最終合同発表会の前になると，学生たちは1年で最も忙しく，頭も体力も振り絞る時期を迎える。4月以降蓄積してきたデータの整理・分析だけでなく，それを解釈する理論的枠組みも必要なので，先行文献の検討も猛スピードで進める。この頃になると教員のほうも，学生からの要請に応えて，連日，昼休みも放課後も実習に捧げることになる。膨大なデータを整理して焦点を絞り，先行研究も踏まえてストーリーを作る，という大技をこの短期間に教えることができるのは，実習で教員と学生が密接に関わるからこその利点であろう。私たち教員は，彼らが4年次で卒業研究をするときに，この経験が活きるようにと願いつつ，丁寧な指導を心がける。

コース全員が参加する最終発表会では，約20～30分の発表と10～15分の質疑応答でそれぞれの班が力を注いだ実習の成果を披露する。その後，調査データを使ったレポートの書き方を指導し，冬休みの課題としてレポートを作成する。1月中は提出されたレポートの指導と再提出にあてられ2月中旬に授業を終了した。

### 2010年度の授業 ── 職人研究の展開

2年目の「仕事―職人班」の学生は，20名であった。この年の実習は机の上での学習から始めた。新しく参加した学生を中心に，2009年度のフィールドノーツを読み込み，前年度の知見の継承を図る。2010年度末に職人調査の報告書を作成する予定だったため，2年前に行った自営業商店主調査報告書を読んで調査の到達点をイメージし，それとの比較の視点を意識できるようにした。弘前市の都市機能に関わる統計資料の分析も同時に行った。

5月には調査準備を始めた。2010年度は，前年と同じ対象者に本格的な聞き取り調査を行うことと，対象業種を広げて新たな対象者を選び，調査事例数を増やすという2つの方向で進めた。

前者については，まず質問項目をリストアップした。実際にリストの順で質問をするわけではないが，具体的なやりとりをイメージしながら，よりよい聞き取りの仕方を検討する過程が大切である。その結果，対象者のライフヒストリーと職歴，技術の習得過程，材料や道具の入手と販売先，作業所の設立から現在までの概略史などをさらに深く聞き取りすることにした。

新たな対象者の選び出しは，前年度の知見からの必然的な展開である。太鼓製作所での調査から，太鼓の胴の製作をする桶職人との関係が不可分であることがわかり，本稿冒頭のエピソードに記した桶職人を新たな対象者とした。同様に，業種間の関連性や歴史性などを考慮して，鞄製作所，工務店を選び，前年と同様の手順を踏んで，複数回の観察や聞き取り調査を行った。

7月に行われる恒例の中間発表会では，時代の変化への職人の対応として，機械化と営業形態に注目することになった。機械化への対応（機械化したかどうか），需要減への対応（どのように新しい需要を取り込んだか）という2つの分析軸を設定し，「機械化・域内需要」「手作業・域内需要」「大量生産・域外需要」「手作業・域外需要」の4つの象限に分けて，それぞれの事例を位置づけ，モデル化を行った。このテーマでの調査研究も2年目に入り，学生たちも多くの気づきを得ていたので，発表も自信に満ちたものになってきた。

後期には，システマティックな資料整理と分析

を進めた。通時的な比較分析ができるように，年表形式で複数の共通フォーマットを作った。たとえば，それぞれの店の製作品目の変化を追った「品目ヒストリー年表」，会社のできごとを整理した「会社年表」，職人個人のライフイベント（学歴・職歴・地域移動）を整理した「個人のライフヒストリー年表」などである。それを並べて，時代や弘前の街の変化との関連に注目して分析し，必要に応じて追加調査を行った。これらを総合して12月の最終発表会での報告を行い，年が明けてから最終報告書の章立てと分担執筆を経て，2年間の「仕事―職人班」の実習は一応の区切りをみた。

知見として次のことが明らかになった。まず，伝統的なものづくりが残っているようにみえる職種も，たえず，変化に寄り沿う工夫によって現在に至っていることである。職人は高度経済成長期の大きな時代の変化に，機械の導入や新しい製品の開発，新しい販路の開拓などによって対処し，ものづくりを続けてきた。

また，この対処の仕方には，弘前市や日本全体の都市構造の変化や観光化が密接に関わっていることも明らかになった。たとえば，弘前のねぷた祭に太鼓が欠かせないことから，太鼓製作の仕事はある程度確保され，何件かの職人が仕事を続けていた。1965年以降，新興住宅地ができると，ねぷたの団体が増えたために太鼓の需要が増す。一方，全国的にみれば，高度経済成長期以後，太鼓職人の数が減ったため，その注文は全国からくるようになった。桶職人は太鼓の胴の製作に主力を置くことで変化の時期を乗り越え，全国の太鼓の需要を受けて，様々な地域で使う太鼓の胴を作るようになっている。また，打ち刃物はリンゴ栽培の作業効率と密接に関わり，畳や印鑑製作は，学生や社会人の流出入が定期的に起こる弘前という都市の特徴を反映している。

さらに，ライフヒストリーに注目すると，創業・就業・継承・地域移動にはいくつかのパターンが見出せた。たとえば家業を継ぐために地域外に修行に出るパターン，家の手伝いをするうちに技術を習得し，結果的に家業を継承するパターン，家の継承とは別に，技術の下地があって店だけを継承したり，地域外から新たに参入するパターンもある。これを家の継承，店の継承，技術の継承という観点から自営業主やタクシードライバーの事例と比較すると，それぞれの地域移動や職業移動に共通する傾向があることがわかった。

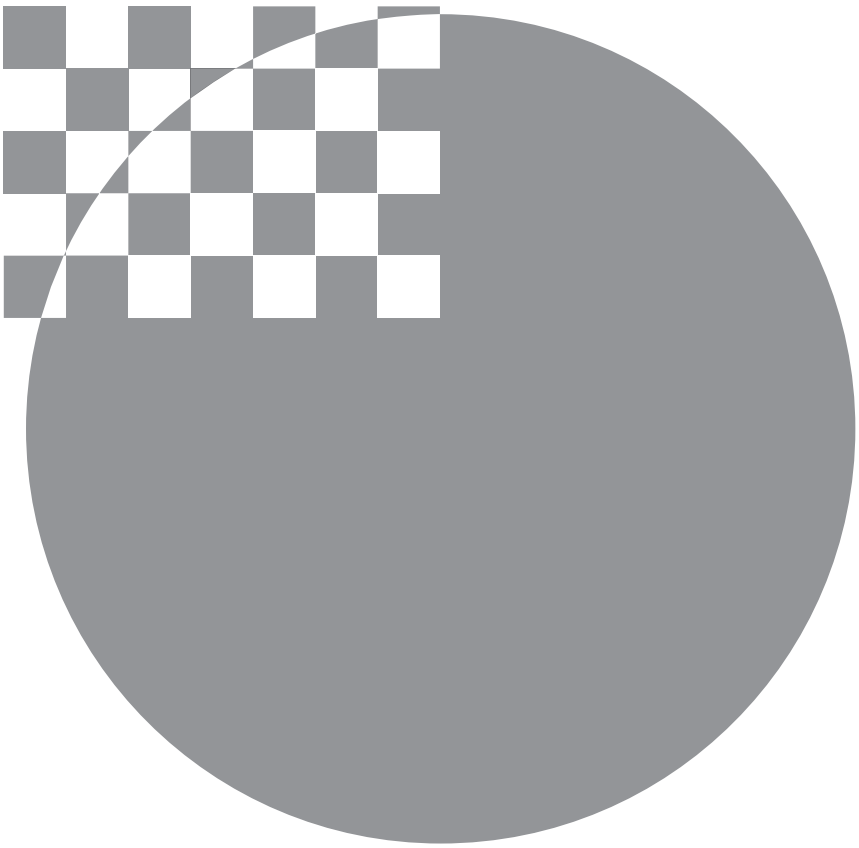
### ブックレットを出版する

例年なら，この社会調査実習は最終報告書の作成と協力者への配布ですべて終了するのだが，この職人調査には続きがある。成果の一部をブックレットとして出版したのだ。この実習では，職人の仕事に触れた学生たちの驚きや感動が大きく，その分だけ学生の成長も著しかった。研究の資料的価値はもちろんであるが，職人さんたちの仕事ぶりや仕事への姿勢を，ぜひ多くの人に知ってほしいと私たちは考えた。そして，調査協力者にお返しする意味でも，大学の教育成果の発信や地域貢献としても，学生自身が執筆するブックレットの出版を思い立った。幸い，弘前大学には出版会があり，こうした書物を積極的に世に出してくれる。

出版までにはかなりの時間を要した。学生の草稿に朱を入れては返し，修正を3回以上繰り返した。調査協力者にも確認・修正をしてもらい，最後は教員がひきとって最終稿としてまとめた。そして，ようやく『ものづくりに生きる人々――旧城下町・弘前の職人』が弘前大学出版会から出されたのは，執筆を始めてから1年半ほどのちのことであった。幸いこの本は，学生への教育効果や地域貢献が評価され，第3回弘前大学出版会賞（2012年）を受賞することができた。かけた労力も相当であったが，調査協力者にも喜ばれ，お返しとまではいえないまでも，最低限の謝意は示せたように思う。

## 4 おわりに

フィールドワークを核とした社会調査実習の授業は，地域の方々の協力なしには成立しない。時間外の共同作業や準備も多いので，学生たちにとってはかなりの負担になる。教員にとっても同様で，実のある実習にしようと思えば，それに割く時間と労力は並大抵ではない。しかし，ほかの授業では得られない気づきと実りを得ることができる。

調査協力者との出会いを通じて，学生たちが成

長していくさまを見ることや，社会人となった彼らがその経験を活かしていると聞くことは，教員としての大きな喜びである。けれども，研究者として胸躍るのは，当初設定した計画の枠をはるかに超えるような成果を学生が持ち帰る現場にいあわせることである。社会調査実習は，フィールドワークの醍醐味を常に発見させてくれるという点で，私たち教員にとっても，重要な授業なのである。